

小林多喜二の小樽高商卒業

倉 田 稔

も く じ

はじめに

- 1 大正11年の情勢
- 2 高商2年の作品
- 3 姉の結婚
- 4 弁論大会
- 5 高商3年になって
- 6 南亮三郎
- 7 志賀直哉との文通
- 8 近代劇研究会
- 9 関東大震災と平沢計七
- 10 外語劇
- 11 大正12年の情勢
- 12 はぎとられたクロボトキン
- 13 卒業論文
- 14 小樽のアナキズム
- 15 宇野長作
- 16 多喜二の文学
- 17 高商3年の作品
- 18 就職と卒業

はじめに

これは、小林多喜二伝（9）にあたる。

1 大正11年の情勢

大正11年の情勢は、こうである。高商に大西文庫が設置された。軍縮が実行された。陸海軍の人員整理であり、これが後の小樽高商軍教事件と関連する。この年、1922年8月1日に、小樽は区制から代わって、市制が施行された。この二年前に第一回国勢調査が行われ、小樽の人口は10万8千人であった。市制をしいたこの年は、人口117953人、22909世帯であった。ただし現在の小樽市よりも地域は狭い。

全国的な情勢でいえば、2月に日本農民総同盟が、3月に全国水平社が、4月に日本農民組合が創立大会を開いた。日本農民総同盟はその後自然消滅した。日本農民組合は、賀川豊彦と杉山元治郎によって作られた。

1920年に日本社会主義同盟ができた。その時、創立大会で3000人がいた。全体としてはサンディカリストが多かった。1921年5月にこれは解散した。1921年に友愛会（1912年創立）は、日本労働総同盟と名称を変えた。そこでもアナルコ・サンディカリズムが強かった。1920年から22年までは、労働運動でサンディカリズム全盛の時代であった。

ロシア革命まで、日本の社会主義者たちは、レーニンやボルシェヴィキの活動や理論をほとんど知らなかった。彼らはロシア革命でレーニン理論に関心をもった。1920年からは日本でボルシェヴィキ理解が前進した。1919年にコミンテルンがあまり準備なしで創立したが、日本人は参加しなかった。翌年の第2回大会（1920年）にも参加しなかった。

コミンテルンに接触した初めは、大杉栄だった。1920年に、コミンテルン主宰の極東社会主義大会に大杉だけが参加した。大杉はアナキストであった。1921年前半にアナキスト・ボルシェヴィキの協力時代が終った。1921年にコミンテルン日本支部準備会が数人によって作られた。ついでコミンテル

ンに接触したのは、近藤栄蔵だった。彼は上海の極東ビューローに行ったが、個人的失敗で、帰りに捕まった。

第3回コミンテルン大会（1921年）に、アメリカから2人の日本人が出た。日本人代表は出ていなかった。だが大会は、日本の準備会の結成を確認している。1921年にイルクーツクで、極東民族会議予備会議があり、色々な団体の日本人代表11人が行き、1922年のモスクワの極東民族会議へも出席した。

さて、日本共産党創立大会が非合法に開かれた。それは、1922（大正11）年7月15日、場所は渋谷伊達町の高瀬清の間借りしていた2階の6畳間、参加者は、堺利彦、山川均、近藤栄蔵、吉川守圀、橋浦時雄、浦田武雄、渡辺満三、高瀬清の8人である¹⁾。ここで決定されたのは、コミンテルン規約、21カ条の加盟条件、などである。ただし天皇制問題は、恐ろしくて、なかなか話せなかった。暫定的に執行委員に、堺、山川、近藤、吉川、橋浦、荒畑寒村、高津正道の7人が選ばれ、堺が代表者になった。コミンテルン第4回大会に派遣する代表が選ばれ、結局、川内唯彦と高瀬が9月に日本を出発し、11月の大会に出席した。日本共産党の創立は、大きな歴史的意義があると云われる。しかしこれは各派社会主義者の寄り集まりであって、「未熟児」であった。なおこの頃、またはその直後、第1次共産党に加わった者は、上記以外に、徳田球一、野坂参三、赤松克麿、山本懸蔵、河田賢治、杉浦啓一、辻井民之助、中村善明、渡辺政之輔、葉山嘉樹、佐野学、市川正一、佐野文夫、青野季吉、猪股津南雄、鈴木茂三郎などである。

11月にコミンテルン第4回大会が開かれ、62カ国から340人の代表がモスクワに集まった。大会は、日本共産党を正式に日本支部として確立した。また日本共産党綱領委員会が大会の前にでき、ブハーリンと片山潜らが委員となって、大会後、綱領ができあがった。これを、派遣された川内、高瀬がもちかえった。

ここで“第一次”日本共産党というのは、大正13年（1924年）2月に、同

1) 犬丸義一『第一次日本共産党の研究』青木書店 1993年、183ページ。これは、同氏『日本共産党の成立』の増補版である。

党が解散したからである。第一次共産党はだから、一年半しか活動しなかったことになる。これが再建されるのは1926年12月である。

また学生社会科学連合会もできた。この年は、「枯れすすき」²⁾の歌が流行っていた。童謡「雀の学校」「籠の鳥」「馬賊の唄」がひろく歌われた³⁾。作家有島武郎が有島農場の解放をした。

2 高商2年の作品

小林多喜二は高商二年生の時、小説「龍介と乞食」を発表した。監獄部屋から追われた人々が乞食になり、それを自分の見聞をまぜながら描き、ある乞食に出会い、彼に騙される話である。これは、文章がクドイが、掌編小説として成り立っている。

多喜二は同じく高商二年生の時、小説「兄」⁴⁾を発表した。それは『文章倶楽部』(新潮社)1922年12月号に掲載された。懸賞当選作で、入選である。これは遅くとも10月までには脱稿していた。多喜二の小説「兄」のモデルは、嶋田正策とその弟正克(まさかつ)である⁵⁾。正策の弟は正克という。彼は高等小学校を出た。そして師範学校へ入りたかったが、年齢の関係で入れず、鉄道講習所に入った。そこには普通科、専門部、高等部があった。その専門部を出てから、彼は高等部へ行こうとしたが、高等部がつぶれてしまい、専門部で終わった。また彼は大学へ行きたいと言ったが、行けなかった。というのはこうである。彼から正策に、「大学に行きたいから月10円くらい貸してもらいたい」と申し入れがあった。だが当時、正策は父母兄弟と離れて生活していた結果、家族という実感が薄れていたため、拒否してしまった。こうして弟は大学を断念した。そして鉄道技師となり、土木を担当する。小樽築港の貯炭場の高架を作ったのは彼である。終戦時、急性肺炎で亡くなった。

2) 正確には船頭小唄。俗称、枯れすすき。野口雨情作詞、中山晋平作曲。大正10年に作られた。

3) 土井大助『小林多喜二』汐文社 1979年。

4) 『小林多喜二全集』(新)新日本出版社(以下『全集』と略)第6巻 1982年、所収。

5) 島田正策氏の言明による。

さてこの小説は、主に三人の登場人物からなる。兄・賢吉は嶋田、弟・久二は正克、Tは多喜二である。もちろんフィクションが入っている。多喜二は「俺は何でも小説にしてしまう。・・」と言っていたが、とうとう嶋田もネタにされてしまった⁶⁾。嶋田が何か喋ったことを多喜二が小説化したのであろう。

その小説にはその弟が出ている。弟は特待生であり、勉強をしない兄はそれにこだわりがある。しゃくなことに、特待生の弟に三人の女性からからラブレターがきている、というものである。この小説のどこが現実と重なっているかは分からない。また文章はしっかり書けているが、小説としては筋がつまらない。

多喜二は、1923年1月に「健」を『新興文学』にのせた。1922年10月筆である⁷⁾。これは、彼の実の兄を主人公に見立てた作品で、かなりよい。

多喜二は、小説「継祖母のこと」⁸⁾を小樽高商の時代に書いた。1923年3月、高商「校友会誌」にのった。二月筆である。つまり秋田時代のことを書いている。この好短編は、なかなか味わいがある。そしてこれはほとんどフィクションである。

この小説のヒロインお仙は、健(=主人公)の祖父と、若くして結婚した。健もお仙になつき、彼女は家族ともうまくいっていた。さて、この継祖母は男の子を生んだ。そのため、自分の子と義理の子との、愛情と義理に挟まれる。さて、健の弟が池にはまって死ぬ。そして健の叔母が気が違う。その二つがすべてこの継祖母のせいにさせられ、彼女は井戸に身を投げる、という話である。

この小説の舞台は、本州の農村である。多喜二には、実際に継祖母ツネ(1826～1904)がいた。その人は彼が生まれて一年後に亡くなったので、多喜二はほとんど知っていない。また彼女が亡くなったのは、七七歳ころだから、小説のように若く美しいうちに自殺したというのは、フィクションである。

実際では多喜二の兄は病死し、弟=多喜二は生きた。だが小説では、兄が生

6) 「私の『自画像』を書いた頃」(『民主文学』)

7) 『全集』第1巻所収。

8) 『全集』第1巻所収。

き、弟が死ぬ、という設定である。

このように筋はフィクションであるが、多喜二が秋田の農村時代について母から聞いた事を、小説の道具だての中に入れていたのであろう。また多喜二は四歳で秋田を去り、小樽に来ているが、ほとんど秋田のことははっきり記憶にはないであろう。もっとも、おぼろげには残っているかもしれない。

さてこの小説で人を魅き付けるのは、この継祖母が周囲の状況の中で、つまり義理の子供がいる中で、我が子を愛してゆかねばならない心理状態の描写である。そして、筆者=多喜二はそれに対して同情している。例えば、健と彼女の子とが喧嘩をする。この時、かの女は、我が子の方を殴りつけるのであった。だが後で、人知れず我が子を抱きしめて泣くのである。

この話は、彼の他の小説でも出て来る。多喜二お気に入りの筋である。

3 姉の結婚

1922年（大正11年）、多喜二が高商2年の時、7月17日に姉のチマが、泰北銀行に勤めていた朝里の佐藤藤吉と結婚した⁹⁾。佐藤氏は、泰北銀行の上の役かまたは支店長である。その店は、今の拓銀の下の国民金融公庫の下にあった。泰北銀行は、一説によると地元資本である。大正末期にできた。藤山要吉が作った。彼は海運業者で、藤山汽船をもっていて、樺太貿易をやった。彼は、大正天皇を泊めるために、公会堂が作った。泰北銀行は、色内支店その他、いくつもあった¹⁰⁾。他の説によると、道外銀行の道内進出ブームの中で、茨城県から、この泰北銀行が小樽へ大正13年に本店を移してきた¹¹⁾。泰北銀行は、小さかった。佐藤氏は後に鉱山に手を出して失敗する。養女を迎えている。

こんな話が残っている¹²⁾。チマは結婚式の後、定山溪へ新婚旅行へ行った。帰りに、結婚指輪を紛失したことに気が付いた。彼女は実家に行き、申し訳な

9) 手塚英孝『小林多喜二』新日本新書、上。

10) 琴坂。

11) 「小樽の史跡」、商大小樽経済史研究会、1979年。

12) 古沢氏から、間接的に。

くて婚家には戻れないと、言った。そこで母と一緒にもう一度定山溪温泉に行き、とうとう指輪を捜し出した。二人とも律儀であることが分かる。

大変妙な話がある。この結婚式の日、ちょうど三浦環（たまき）の音楽会が、花園町の公園館で催された。友人島田正策が多喜二の家に誘いに行き、二人は西へ、姉は東へと別れていった。こうして多喜二は、姉の結婚式に出ないでしまったのである¹³⁾。彼はそれほど音楽が好きであったということもできる。だが三浦¹⁴⁾は推測しているが、姉の花嫁姿が見られないほど、多喜二は辛かった。弟の三吾さんも、チマさんの結婚式には出ていない¹⁵⁾。つまり小樽にいなかった。こうして弟2人は、姉の結婚式にでていないのである。チマさんは、後に語る。多喜二が家に帰ってきて、どんなに淋しかったか、誰もいないし、「ちょうど葬式のあとのようだな」と、しみじみ母に言った。¹⁶⁾

多喜二は「島田正策『自画像』によせて」で、姉チマについて語っている。1922年8月22日とあるから、姉の結婚直後である。「自分の姉は秋田の生まれだ。四、五歳のとき小樽へ来た。小学校に入った、卒業して、すぐ高等女学校に入った。自分はその時の姉はきっと、何か希望を望んでいたと思ったが、結婚してしまった。・・・そして、もう平凡なワイフになってしまったのだ。『女って、結婚すると、ホッとするものだ』

と、ある時自分にそう云った。それは何を語っているか。・・・」¹⁷⁾

多喜二は、音楽が大好きであった。特にクラシック音楽である。彼の音楽鑑賞能力は、かなり高かった。¹⁸⁾多喜二は例えば、嶋田と、ベートーベンの第9交響曲に肉声を入れている点を取り上げて、その特殊性を論じたりした。彼自身もいろいろな曲を歌っていた。音符も読めた。当時北海道では、せいぜいレコード・コンサートが催されるくらいだったが、ほとんど欠かさずに聴きに

13) 手塚英孝, 76ページ。

14) 『母』新潮社。

15) 三吾さんインタビューより。

16) 『北方文芸』1968年3月。

17) 『全集』第6巻 567ページ。

18) 島田。

行った。こうして彼の音楽鑑賞は、ほとんどレコードによるものであった。蓄音機はまだ持っていなかった。

藤橋（＝勝見茂）によれば、多喜二は「たしかに声はよかった・・・」¹⁹⁾ として口笛をよく吹いて歩いていた。多喜二の1年後輩で直島一郎が入学し、音楽部を作り、第1回の音楽会をした。多喜二が2年の時らしい。特別出演したデーゲン先生がベートーヴェンの月光をひいた。

4 弁論大会

高商では毎年弁論大会があった。これは多喜二が1年か2年の時の情景である。安宅文夫は言う。

弁論大会で金井健四郎が演説していた。それを聞いている多喜二が、「改造！改造！」と野次っている。

安宅は、弁論大会なのに変だな、野次るとは？ 多喜二はそんな人ではないのに、と思って、しかし聞いていた。だが後で分かった。金井は、雑誌『改造』の中の、ある箇所をそのまま喋っていたのだ。それを多喜二が、『改造』の引き写しという意味で、野次っていたのである。²⁰⁾

当時、『改造』²¹⁾ がどれほど読まれていたかの証拠であり、また多喜二もよくこれを読んでいたことがわかる。

5 高商3年になって

福田勇一郎は、オールバックの髪に縁なし眼鏡という当時としては洒落しゃれた男、いつも大熊先生は授業の前後に福田と心安くいろいろ質疑応答していた。

多喜二、乗富、福田、3人の卒業寸前の写真がある。これは、多喜二の家に遊びに行った時の写真である。(越崎) この写真ができてからのある日、多喜

19) 『北方文芸』1968年3月号。

20) 安宅先生の小生あて手紙。

21) 実業家山本実彦が大正8年に発刊した。

二は「昨夜、おばあちゃんに見せたら、この三人ともロクな死にかたはしないと云った」と笑っていた。おばあちゃんというのは、母のことである。

何ということもなしに、この3人は親しくなり、学校の帰りによく誘い合わせて地獄坂を下りた。ある時、多喜二が「マルクスってどんな顔？」と言い出したので坂の途中から図書館に引き返し、河上の「貧乏物語」を借りて、その写真を見せたことがあった。

福田は、築港駅近くの多喜二の家に遊びに行ったことがある。書棚にゲーテ全集が光って並んでいた。大学ノートに小さくぎっしり書き込んだ彼の小説原稿を繰りながら「志賀（直哉）先生から返事をもらった」と嬉しそうに話した。後年の彼の片鱗だに見出すことができなかった。

乗富は当時から先鋭的であったようだ。〔福田は、〕彼から借りた当時発禁の書『共産党宣言』英訳本を徹宵して読み興奮した。²²⁾

1923年7月に、多喜二の小説「藪入」が、『新興文学』にのった。四月筆である。10月に「ロクの恋物語」が『高商校友会誌』にのった。同月の筆である。²³⁾

嶋田は、多喜二が高商時代の夏休みに、多喜二を訪ねて行った事がある。いつかは分からないが、多喜二が2年か3年の時ではないだろうか。当時彼は家の近くの海で、防波堤の工事があり、潜水夫に空気を送るポンプ押しのアルバイトをしていたが、その日身体の具合が悪く床に入っていた。その側に小型の原稿用紙が三十センチ位積んであった。それは『小樽新聞』に投稿したが没になったものだと言っていた。嶋田は読まなかったので内容は分からない。幻の作品である、と嶋田は言う²⁴⁾。これはしかし、現在我々が見ることが出来る作品であるかもしれない。

22) 『緑丘』42。

23) とともに『全集』第1巻。

24) 嶋田、小林多喜二全集月報2, 11ページ。

6 南亮三郎

南亮三郎²⁵⁾は、東京商科大学に進み、左右田の弟子となり、大正12年に卒業した。彼はクリスチャンになっていた。南は、「都落ち」(本人の言葉)して、あるいは大西を尊敬していたし、昔は地方に出ることにあまり抵抗がなかったから、小樽高商の専任講師となった。南は、大正12年4月小樽に赴任した。その時の3年生は小林多喜二たちの組であり、2年生には伊藤整がいた。その秋から経済原論を担当し、高学年向けに社会政策をうけもった。この大正12年10月ころ、南は人口論に傾斜した。南の若い時の講義は、ほとんど『資本論』そのままだった、という学生がいる²⁶⁾。大正13年2月、大西教授没後2年の追悼演説会が行われ、南は人口論を論じた。同年11月に教授になった。昭和3年3月から5年9月まで、留学した。後、昭和23年7月に、教授不適格で南は小樽高商を去った。²⁷⁾戦時中、『皇国経済学』を書いたため、マッカーサーの教職追放令を受けたとされる。昭和60年亡くなった。

概して、第2次大戦中は、共産主義者や社会主義者はもちろんのこと、自由主義者・民主主義者さえ、教壇には立てず、天皇制政府によって辞職させられた。この時代に教壇にあった人は、だから、まともな人はもういなかったのだ。例外として、何も書かず何も公に発言しない人だけが残れないわけではなかった。

さて南は赴任したこの初年度に第3学年で、キャナン²⁸⁾の“Wealth”を講読した。この3年生に多喜二がいた。2・3クラスの合併だったので個々の学生と知り合うという機会は比較的少なかった。この年、南は校友会編纂部の部長になった。小林は編纂部の学生理事として校友会雑誌の編纂をしていた。

小林と南が初めて知り合ったのは、次の号の編纂の方針について多喜二が相

25) 小樽高商卒業までは、かつて書いた。

26) 浜林正夫談。

27) 大野純一とライヴアルだったので、それが原因とも言われる。(浜林)

28) アダム・スミス研究者、イギリスの経済学者、ロンドン大学教授だった。

談に来た時であった。

内容については南は何もいわなかった。ただ、「この雑誌は在学生の間ばかりでなく、卒業生との連絡の機能も果しているので、雑誌の末尾に同窓会関係の記事をのせるスペースをとり、その部分をはっきりした体裁であらわすように本文との間に、赤い挿し紙でも一枚いれてはどうか」といった。

小林は「それは大した問題ではない」と言ったようだった。

南は思った。いわれてみれば本当に大した問題でもないことを提案したもののだが、小林の返答もまたかなりとげとげしいものを含んでいた。この男は変わっているわい、と南は思った。

やがて出た校友会雑誌には赤い挿し紙は入っていなかった。²⁹⁾

7 志賀直哉との文通

多喜二は、中央文壇で活躍していた菊池寛、里見 弴、武者小路実篤等の作品をよく読んでいた。嶋田が買った菊池寛の『文芸往来』の中で、志賀直哉の「城の崎にて」について、作者が流れに臨んで、石の上で鳴いている河鹿に小石を投げると、その小石が当たってしまうという描写を挙げて、巧まざるうまさと誉めていた。嶋田は、多喜二もそれを読んで、志賀のものを読み始め、熱中するようになったのではないかと思う、と書く³⁰⁾。

志賀は、はじめて多喜二から手紙が来た頃のことを、「何でもその頃に北海道の無名の文学青年から、文学について大へんな気焰をあげた手紙がしょっちゅう来る。……それが小林多喜二君だった。」と述べる。³¹⁾

8 近代劇研究会

多喜二は、乗富道夫（1903-1934）と共に近代劇研究会に入っていた。乗富は、福岡県大牟田市に生まれた。樺太の豊原中学から小樽高商に入学した。

29) 『緑丘』42。

30) 嶋田，小林多喜二全集月報2。

31) 『文学案内』1935年11月号。

多喜二と同期生であった。卒業論文に「共産党宣言」を翻訳した。卒業後、安田銀行函館支店に勤め、労働農民党员となり、産業労働調査所支所長で、北洋漁業の研究者であった。1930年検挙され、安田銀行を解雇されて、上京し、1934年9月、病没した。

姉チマさんは言う。「高商のころは演劇をやりましたから、演劇の本、たくさんあったんですよ。」³²⁾

多喜二が3年の時、多分4月の終りに、1年D組の教室に入ってきて、こう呼びかけた。「高商に入ったからといって、簿記やソロバンばかり勉強するのが能じゃあない。たまには文学や劇の勉強もした方がいい。」この組に中野清一がいた。彼は嬉しくなって、廊下まで追いかけていった。多喜二は、近代劇研究会というのがあり、毎週1回か2回、いまはストリンドベルクの翻訳ものを読み合わせしていること、その場所はどどこかで、時間は・・・と、親切に教えた。

中野はストリンドベルクの読書会に7・8回出席した。多喜二は、ストリンドベルクと発音するのが正しいと教えた。場所は、第2寮の福田勇一郎の部屋だったようだ。多喜二の同期の桜井長徳も常連の1人だったようだ。多喜二が中心となって、7・8人でストリンドベルクの「債鬼」を読み合った。

この読書会で多喜二は言った。「イブセンの『人形の家』は甘い、ストリンドベルクの作品は芸術品かどうか分からんが、グングン人を引っ張っていく。」

「どんな種類の本でも、本物かどうかは、見せかけで決まりはしない、流行できるのでもない、お金をどっさり稼ぐために書きなぐる奴がゴロゴロしている。読んで、いや読みながら、思わず立ち止まって考えこませる本が一番いい本なんだ。」³³⁾

9 関東大震災と平沢計七

1923（大正12）年九月一日正午、関東大震災が起きた。マグニチュードは

32) 『北方文芸』1968年3月号。

33) 中野清一の稿、『緑丘』42。

7・9であった。昼ごはんの支度で火を使っている家が多く、木造屋も多かったので、東京・横浜で大火災が起きた。地震と火事による死者9万1千余、行方不明4万3千余、をだした。あるいは関東地方全体で10万人の死者と7万人の負傷者を出したともされる。

9月2日から4日にかけて、政府は戒厳令をしいた。2日ころから、朝鮮人が暴動を起こすらしい、朝鮮人が井戸に毒を入れて歩いているという噂が流れた。これは警察が流した。軍隊と警察は、朝鮮人を検挙し、虐殺し始めた。自警団も虐殺を始めた。京浜地方で少なくとも6千人の在日朝鮮人が殺された。軍隊は、それだけでなく社会主義者を虐殺した。救援活動をしていた東京南葛の社会主義者10人、河合義虎、平沢計七らを、亀戸警察で、3日夜、殺した。なお、無政府主義者大杉栄(1885-1923)、そしてその妻伊藤野枝、大杉の小さな甥も、憲兵隊の甘粕によって虐殺された。

多喜二は、この大震災の際に殺された平沢計七の追悼会に弔文を送った^{33a)}。平沢は、『新興文学』に、「二人の中尉」「大衆の力」を載せていた。

平沢計七は、1889年7月14日生まれで、新潟県出身である。高等小学校卒業後、1903年(明治36年)から3年間、日本鉄道大宮工場の職工見習教養場で近代的な労働者養成教育を受け、卒業後、大宮工場を振り出しに近代的な工場労働者として働いた。鍛冶工である。1914年(大正3年)9月または10月、友愛会に入会する。1915年に上京し、「友愛会」本部常任、同、城東連合会長、として活躍した。彼は、ロシア革命に感激して友愛会の『労働及産業』(1918年)に「生きる光明を与えたり」の筆名で投じた。友愛会の役員が機関誌に投じているので、今で云えばヤラセである。それはともかく、それは、よく教科書で出て来るものであり、「オイ小僧ども、心配するな、おまえたちでも天下はとれるのだ！」の一文である。

平沢が生前に出した唯一の作品集は、『創作・労働問題』(1919年6月)である。労働者たちを自覚させる見地から、数多くの作品(小説、戯曲等)を、

33 a) といっても、手紙である。1923年12月15日だから、随分おそい。『全集』第7巻、329-330ページ。

友愛会機関誌『労働及産業』等に発表していった。労働運動の指導者だった。その後「友愛会」が右傾したので、後1920年10月に脱会する、ただちに1920年に「純労働者組合」を結成する。その後この組合は、戦闘的になった。大島町の付近で消費組合「共働社」を創設した。わが国初の「労働劇団」を組織し、自分も俳優として立った。プロレタリア文学と劇団の活動をする。彼は、1923年9月3日に殺された。34才だった。大正労働文学を最もよく体現した文学者であった。作品に；

石炭焚 『労働及産業』1916・9月
 死 同 1917・3月
 赤毛の子『社会改良』 1918・5月
 孝行 同 1918・9月
 御主人様 同 1918・10月
 金貨の音 同 1918・12月
 二人の中尉『新興文学』1923・6月
 暴風雨の前 ？

があり、以上の8つが、『日本プロレタリア文学集』に所収されている。

『平沢計七集』、遺著・創作集『一つの先駆』（1924年）があり、主要作品は、（平沢紫魂 ペン・ネーム）戯曲「工場法」、「牢から出た男」、「大衆の力」、小説「死」、「二人の中尉」、「赤毛の子」だとされる。

大震災後4カ月、1924年1月、『種蒔き雑記』第1冊がでた。これは震災での殉難、被災の事実を伝えたもので、金子洋文の編集・発行である。しかし第1冊で終わった。

1924年6月、『種蒔く人』の後身として『文芸戦線』が出された。これはやはり小牧近江が軸になり、前田河広一郎、金子洋文、柳瀬正夢、山田清三郎、佐々木孝丸、今野賢三らが中心で、青野季吉が理論的指導者であった。8号まで金子が編集し、休刊となった。やがて、葉山嘉樹、黒島伝治、村山知義、里村欣三、林房雄、蔵原惟人らが集まってくるようになる。後に多喜二もここに載せる。1925年6月号から再刊され、山田が編集した。

10 外語劇

小樽高商の大きな年中行事の1つは、3年生を中心に催される外国語大会であった。外語劇大会に、女人禁制の校舎にも若い女性の姿がおおっぴらに見られた³⁴⁾。外語大会は毎秋行われ、劇ばかりでなく、スピーチ（外国語による）もあった。高商では1913年以来、学生の外語劇が行われ、小樽で人気のある行事になっていた。この年は関東大震災義捐として、11月17、18日の、土曜・日曜に行われた。多喜二の出たフランス語劇は「青い鳥」であった。高橋益美先生の指導だったというが、デーゲン先生が演出したともされる。学生・寿原も加わった。第2外国語としてフランス語を学んだ人たちは、メーテルリンクの「青い鳥」を上演することにした。その「森の場」であった。

伊藤整は書く。「このフランス語劇は、その学校で毎年開かれる英仏独支露各国語の学生劇の一つであった。そしてこの写真〔整はその時の写真を掲げる〕の場面は、私が二年生で小林や高浜が三年生の時に行われたので、二年生として参加したのは私一人であった。／文学好きな生徒はフランス語に集まった。」³⁵⁾

小説「ある役割」の中で多喜二は書く。

「チルチルになるTや、犬になるSが、互に何処かでやった絵葉書を見ながら顔を作っていた。ミチルは濃い白粉をペタ／＼ぬっていた。多くさんない鏡はあっちにもって行かれたり、とりもどされたり、ぐる／＼まわっていた。龍介もその中に入って、顔を洗ったり、クリームをぬったり、白粉をつけたりした。「動物は――豚や、馬や、山羊や、野牛や、兎などは、それ／＼”ボール紙でにせてつくった頭をかぶれば、それでよかった。木の精になるものは、途中で採ってきた木の葉などをそれ／＼”色別にした帽子の先にさしていた。」³⁶⁾

高浜は大役である犬を受け持ったが、予定の練習時間にきたことがなく、一

34) 越崎宗一。

35) 『伊藤整全集』第23巻 263ページ。

36) 『小林多喜二全集』第1巻、66ページ。

同をやきもきさせた。しかし当日彼は名演技をやったのけ、フランス語劇が最上の好評を得た。卒業して彼は旭シルクに入社したのであったが、数年ならずして退社し、俳人として再出発した³⁷⁾。高浜は、寿原(=林)が入学していたとき、健康を損ねたことから一年生を足踏みしていた。一言で彼を評せば、なんとなくおおらかであったが、大変器用でなんでも一応そつなくこなした。

この時、青い鳥をどうして飛ばすかが問題になった。結局、青い鳥を絵に描いて、それをプラカードのように高く掲げることに落ち着いたが、その役を仰せつかったのが、伊藤整であった。小林多喜二と伊藤整は親交があったらしく——と、越崎は言うが、それほどでもなかった——、出演中、小林は伊藤に何かと指示していた。

伊藤整は2年生だったが、出た。彼の役は、青い鳥を絵にかいて、それをプラカードのように高くかかげることで、セリフは一言も云わず、かつプログラムにも自分の名は印刷されてないと、コボしていた(越崎)。寿原は、初め林姓で、明治34年3月23日に、加賀市大聖寺で出生した。小松中学校を卒業した。寿原は大正十年に小樽高商に入学した。外語劇では、寿原の「光の精」、豊口の「ミチル」、小林の「羊」、野界の「マロニエ」、茶谷豊彦が樫の木、という配役であった。茶谷は、後に北海ホテルの専務になった。寿原九郎は、後に北洋相互社長になった。

さて2年生の劇が終わって、ハーモニカの独奏が始まった。「オイ、たくさん来ているぜ！ 昨年より多いようだ。」と羊になる小林が幕の間から観客の方をのぞいてみて言った。「シャンが来ているぞ。」広い控え室がいっぱいだった。次が仏語劇だった。(「ある役割」)

羊の小林が、新聞紙をちぎって舞台の前の方にまきちらした。「俺は羊だからなあ、紙を喰うんだよ」。音楽の序奏が始まった。幕がスルスルと引かれた。急激な拍手が起こった。舞台はしばらく空虚。こうして観客の期待を高めて、猫が出た。フランス語の教師は片手にプリントをもって、バックの隅から一生

37) 寿原九郎『さんとう車』昭和51年 233ページ。

37) 懸命のぞいている。チルチル、ミチル、犬が出る。舞台が暗黒になる。チルチルの帽子につけてあるダイヤモンドがまわされる。木の精が飛び出す。動物が出ることになった。兎が出た。馬がでた。牛が出た。羊がフラフラと出て行くと、舞台の前で、その辺に散らしておいた紙屑を拾いあげて頭にかぶっている模型の口の中に入れた。豚もでた。(「ある役割」)

伊藤整は書く。「私の所に、小樽高等商業学校卒業記念アルバムという厚さ一寸近い写真帳がある。・・・その中に「外語劇」という舞台写真がある。それは・・・私が2年生の時に行われたフランス語の「青い鳥」の森の場の写真である。森の中でチルチルとミチルが、獣や樹木の精霊に襲われ、部下の猫には裏切られ、味方になるのは犬だけになって戦っている時、光の精が現れて助かるという場面である。写真の左端に立ち「犬」に扮しているのが、・・・高浜年尾である。また他の一隅には、舞台上手に現われた光の女神の方にまぶしように両手をのばしている羊の面をかぶった学生がいる。そのポーズはかなり意識的にうまく作られていて、その舞台にいる十人ほどの俳優のうち、一番効果的な姿で写っている。それが小林多喜二である。そして羊の小林多喜二の前にかがんでいるのが私である。と言っても私は主要な役の光の女神でもなく、榊(かしわ)の大王でもない。私は榊の大王の侍童として、跪いて右手に青い鳥を捧げている。

・・・もともと脚本には侍童など居ず、チルチルとミチルの捜すその青い鳥は、榊の王様の肩にとまっているのだ。その肩にとまるようない装置ができないので、鳥の持ち役に二年生の私を特に起用したわけであった。従って私が言うための一行のセリフもなかった。」³⁸⁾

デーゲン、高橋両教授の指導で、このフランス語劇は、他の語の劇を抜いた出来ばえの外語劇大会であった。

1924年三月に、多喜二の「ある役割」が、『校友会誌』にのった。それは一月筆である。これは、この劇を扱っている。劇の4カ月後に出たわけだ。豚

38) 『伊藤整全集』第23巻 262-3 ページ。

をやった林を主人公に、フィクションを書いたものである。

伊藤は書く。「多喜二は、その頃の校友会雑誌に小説を書いた。それはその芝居で豚になる男を主人公にしたものだ。・・・自分の好きな少女に自分を目立たせたいと思っていた男が、外語劇に出るので喜ぶが、配役の関係で豚になる。豚の役目はどうやら少女ミチルに特別な興味を示して犬に噛みつかれる事にあるのだ。芝居の当日、それを見に来た恋人の少女が、豚になった男の演技を見て笑いこけるほど本人は憂鬱になり、自分の恋の失敗が分る、という話で、よく出来た作品であった。雑誌の出来るのと芝居の上演が同じ時期になったので、多喜二は豚のお役をした同級生のキゲンをそこねないように、特にモデル問題は無いという断わり書きをその小説につけた。」³⁹⁾

高浜は言う。「小林多喜二は・・・、あの当時すでに演技はうまかったね」。また、小林多喜二はまじめな男で非常に謙虚であった。ニキビがでていて好青年の感じであった、と。伊藤も言う。「小林多喜二はよくフランス語を喋っておりまして。」⁴⁰⁾

11 大正一二年の情勢

できあがった「オモチャのような」(荒畑)日本共産党は、1923年2月4日に、市川で第2回大会を開いた。コミンテルンから派遣者2人が帰国し、綱領草案(22年テーゼ)をもって来たから、審議する必要があった。16名が参加した。綱領が審議未了となり、3月15日に石神井で臨時大会が開かれた。23名が出席し、この時の党員数は58名だった⁴¹⁾。綱領全体は承認され、天皇制問題、革命戦略は審議未了となった。6月に、この第1次共産党が一斉検挙された。それは警察がスパイを使ったもので、党員名簿を警察が入手した。この一斉検挙によって、党内で解党の動きができあがった。その上、9月に関東大震災が

39) 同, 264ページ。

40) 『緑丘』No.10, 6ページ。

41) 犬丸書に、それらの党員の経歴が出ている。その中の1人、田所輝明(1900-1934)は、小樽の生まれ、苦学して小樽中学を卒業し、早稲田大学に入学した人物である。

起きた。これは社会主義者が見つかり次第殺される状況を意味した。

理論的リーダー山川均は、日本共産党の創立に努力していた。そして確かに創立の際にはそうだった。しかし間もなく、共産党の解党を主張した。そして党再建に反対した⁴²⁾。党内では解党論が出始め、荒畑寒村以外は殆ど解党に傾いた。とうとう共産党は1924年2月に解党した。ただし、残務整理をする事務局=ビューローを残した。

一月十日、「国民精神作興に関する詔書」が出て、大正デモクラシーが抑圧された。一二月二七日に、皇太子狙撃事件が起きた。大正12年に、特高が主要府県に設置された。それまで警視庁だけであった。大正12年、小樽で全日本スキー選手権大会が開かれた。

12 はぎとられたクロボトキン

大杉栄論集に、クロボトキン⁴³⁾の「青年に訴ふ」を大杉が訳したものがある。それは高商図書館にもあった。その最後の第十章は、クロボトキンが労働者、とくに青年労働者に呼びかけたものであり、大杉は明治四〇年に、この「青年に訴ふ」の訳文を『平民新聞』に載せたが、最後の十章のために起訴され、刑務所に入れられ、出版のさいも、ここが削られた。大杉栄全集には、そのた

42) 関幸夫『山川イズムと福本イズム』新日本出版 1992年。

43) クロボトキン (Пётр А. Кропоткин, 1842-1921)。ロシアの有名なアナキスト思想家。モスクワ生まれ、貴族出身、公爵。1862年、将校になり、シベリアへ任官。シベリア探検をする。ポーランド反乱(1863)を見て、軍籍を離れる。1867年、ロシアに帰り、大学、数学科に入る。シベリア地図の検討をし、アレクサンダー・フォン・フンボルト(1768-1859)の推論その他を改善する。地理学協会に勤務し、氷河踏査をする。1874年、逮捕さる。それまで社会主義の宣伝サークル作り。ペトロ・パウロフスク監獄に入れられる。その後、脱走。第1インタショナル・ジェネーブ統一支部に加わる。しかしインタショナルの別の支部(アナキスト系、ジェネーブ)へ移る。バクーニンのアナキストになる。バクーニンの影響を受ける。ロンドンへ亡命。著作: *Memoirs of a Revolutionary, Atlantic Monthly*, 1898. 9-1899. 9に連載。1899または1900年出版。仏訳 Paris 1901. ; 露訳 London 1902. ; 邦訳 大杉栄『一革命家の思出』1920年; 現在、『ある革命家の手記』岩波文庫; 『相互扶助論』; 『パンの略取』; 『田園・工場・仕事場』; 邦訳『クロボトキン全集』全12巻, 1928-1930。日本で、幸徳、大杉、有島、啄木に影響を与えた。

め、この第十章が検閲で削られ、その部分が白紙になっていた。

その部分に多喜二はこまかいペン字で訳文を書き込んだ。表題のわきには「はぎとられた第十章全部を補充してあるから読まれる事を望む」とあり、訳文のあとには、「この官憲からけずり取られた第十章を読みたく思う人は多いことと思う。それでようやく An Appeal to the Young を手に入れたので下手な訳だがここだけ入れて置くことにする」と書き込まれている。⁴⁴⁾

その大杉栄論集には、「多喜二訳 クロポトキン10章 大正13年1月29日」と記入されてある。

13 卒業論文

中野清一は、明治38年（1905）年1月14日に、小樽に生まれた。小樽の色内小を卒業し、北海商業を卒業した。小樽高商に入学した。

大正15年に小樽高商から九州帝国大学へ進んだ。高田保馬のもとで社会学・経済学を専攻した。昭和4年または5年に卒業し、小樽高商へ講師として赴任し、昭和6年に教授となった。論理学・哲学・社会学・心理学を担当した。昭和14年4月に、建国大学（満州国・新京）の教授になった。昭和19年または18年11月に国立民族学研究所に移って、その所員となった。所長は高田保馬であった。戦後、一時、横浜工業経営専門学校、そして横浜経専（糸魚川が学長、今の神奈川大）に移った。昭和24年8月に、広島大学政経学部へ、教授として行き、昭和40年に退官し、立命館大学へ教授として行った。昭和50年に退職した。その後、「社会学と経済学の相関年表」を作った。編著として『広島・原爆災害の爪跡』京都・蒼林社 昭和57年、がある。平成5年7月2日に宇治で亡くなった。

昭和2年の7月の初め頃、中野清一が多喜二と歩きながら聞いた話である。彼は多喜二と知り合っていたし、中野が小樽に帰省中で、多喜二がすでに卒業して銀行員であった。それによると、こうである。

44) これは小樽商大生松原敏樹が発見した。訳文は『全集』第7巻に入った。卒業論文のために、多喜二が読んだのであろう。

多喜二は第2外語がフランス語だったのでワルラス⁴⁵⁾かゴッセン⁴⁶⁾、特に何ということなく、ゴッセンにひかれていた。ゴッセンを卒業論文のテーマにしようと始めは考えていた。

「よくは分らないが、心理主義的な欲望説の立場から、ゴッセンが労働価値説をどんなぐあいに批判するのか、それを調べたかったのだな。ほら、限界効用均等の法則とかいうのがあるだろう。ゴッセン御自慢の学説らしいな。ぼくは別に経済学説史上の偉業をつくろうなどと大それた気持ちはなかったが、本当の均等法則はもう少し別のところにあるんじゃないかと考えたりしてね。だけど何度読んでもサッパリ何のことか分らない。客観学説だの主観学説だのと、学者の生甲斐はまるで別世界のものなのだな。けれども読まなくちやあ、と思ひ直して何度も読もうとガムシャラに食い下がったが、結局駄目さ。ゴッセンの廻りの連中を読みあさって、とやっているうちに、大熊〔信行〕先生に習った記憶もあって、今度はアントン・メンガー⁴⁷⁾にひかれはじめてね。それも生存権説を主張した、というのに魅力を感じたという程度のしろものだがね。だけど、ドイツ語じゃ歯がたたないと思ってやめっちゃった。

英語で行こうと考え直し、カアペンター⁴⁸⁾の思想 何かで聞きかじっていたので、カアペンターにきめたものの、原書がどこにもなかった。だれかの講義でカアペンターのこと聞いたから、その人を思いだして、その人のところへも尋ねて行ったよ。アッサリしたものだな、カアペンターの本は一冊も原書も翻訳もないといわれた。教室の講義ではカアペンターを何度も読んだかのよう

45) Warlas (1834-1910), スイスの経済学者, ローザンヌ大学教授。主著『純粹経済学要論』は、小樽高商の手塚寿郎によって翻訳される。岩波文庫で上下2巻。ジェヴォンズ、メンガーとともに、限界効用価値説を出した。

46) ゴッセン Gossen (1810-58)。ドイツの経済学者。限界効用理論の先駆、『人間の交換の諸法則』を書く。

47) Anton Menger (1841-1906), オーストリアの法学者, 法律による社会主義の建設を目標にした。全労働収益権を説いた。カール・メンガー(経済学者)は兄である。

48) Edward Carpenter (1844-1929), イギリスの評論家で詩人, 社会主義に共鳴した。〔研〕Chushichi Tsuzuki, *Edward Carpenter*. 訳, 晶文社。

に講義していたんだがな。アレと思ったよ。孫引きで給料もらえるんだよね。もうイヤになったから、ストリンドベルク⁴⁹⁾を書こうと考え直した。根岸 [正一] 先生に相談したら、文学ではね、と首をかしげられた。文学ものと学問ものと、一緒に組み合わせてもいいでしょうか、と念のために聞いたら、マアいいだろうと言われた。それから校友会誌の編集顧問だった糸魚川先生に相談したよ。糸魚川先生なら、銀行論の先生でも童話を書いていたし、童話の関係で恋愛をし、いまの奥さんと結婚したという噂を聞いていたからね。それでスウトロ⁵⁰⁾の「見捨てられた人々」というドラマ、短いものだが、ウエストエンドの貧乏人ドラマだったな、それと、君がよく知っている斉藤 [磯吉] 君から借りたクロボトキンの「パンの略取」の原書を借りてね、両方共翻訳して出すことに決めたんだ。糸さん⁵¹⁾も、あのおおらかな響きの声で、それでいいよ、と言ってくれたしね。・・・適当に序文を書けよと言われて、それを書いて出した。その序文が本当の卒業論文だったわけだな。」⁵²⁾

この話を聞いた翌日、中野は高商の図書館へゆき、多喜二の卒論を探しだして読みふけた。序論の一部分はそのまま書き写したほどであった。

多喜二の卒業論文は、「見捨てられた人とパンの征服 及びそれに対する附言。」とあり、自序、そしてアルフレッド・スウトロの「見捨てられた人」の翻訳、およびクロボトキン「パンの征服」の第5章の翻訳である。イギリスの

49) Strindberg (1849-1912), スウェーデンの文学者、自伝的小説『赤い部屋』(1879年)で認められる。『令嬢ジュリー』(1888年)などがある。

50) Alfred Sutro (1863-1933)。イギリスの劇作家。

Alfred Sutro には、次のような作品がある。

The Choice ; Freedom ; The Two Virtues ; Five Little Plays ; The Laughing Lady ; The Great Well ; Far Above Rubies ; A Man with A Heart ; The Desperate Loves ; The Gave Of Illusion ; The Perfect Lover ; The Fascinating Mr Vanderveldt ; John Glayde's Honour ; The Barrier ; The Builder Of Bridges ; The Fire Screen ; The Perplexed Husband ; Uncle Anyhow ; Living Together. A play in four acts. London 1929.

以上が、Duchworth, London で出ている。

51) 糸魚川祐三郎先生。

52) 『緑丘』42。

ストロの戯曲は失業家庭の惨状を描いたものである。⁵³⁾

多喜二の卒論自体、現物は、現在失われており、官憲に押収された。そして手塚による筆写が小樽商科大学図書館に保存されている。その自序の最後に、この卒業論文のなりたちが書かれている。しかし翻訳2つであるから「論文」とはとても言えないものである。ここでクロポトキンが訳されていることは興味深い。「自序」の前のいわば扉の部分に、バルビュスの『クラルテ』の真理を説いた同じ一節が引用されている。⁵⁴⁾

2年上の越崎は云う。「卒業に際しては、卒業論文を提出せねばならぬことになっていたが、これは翻訳でもよいとされていた。」⁵⁵⁾

本来実務的な高商にも、思想的・知的な変化が訪れていた。大正5、6年ころまでの卒業論文には「小樽木材商業調査」とか「手形仲買業を論ず」などの商業・金融の実際を論じたものが多かったのに、大正10年ころから「独占の諸問題」や「ギルド社会主義を論ず」などの社会問題論・社会主義論・資本主義論をテーマにするものが目だってきた⁵⁶⁾。多喜二のいたころは、「学園のルネッサンス」と言われた時代であった。⁵⁷⁾

14 小樽のアナキズム

小林多喜二がアナキズムを卒業論文に取り上げたので、多喜二はアナキスト（無政府主義者）だったのだろうか⁵⁸⁾。まず、小樽の下記のアナキストたちと多喜二は交流がなかった。当時、多喜二は実践・思想運動に携わらなかったもので、特にアナ・ボル論争の成果を取り入れていない。実際は、多喜二はアナキズムとマルクス主義とを特に鋭く峻別して意識していなかった。つまり広い意味の社会主義に関心を寄せたのだった。もちろん後年2つの運動を

53) 土井大助『小林多喜二』汐文社 1979年。

54) 『クラルテ』復刻の解説、布野、4ページ。

55) 越崎宗一『郷土史的自叙伝』昭和53年、46ページ。

56) 『緑丘五十年史』小樽商科大学。

57) 学園ルネッサンスは、小樽だけでも、高商だけでもなく、全国的だった。(浜林)

58) この節は、琴坂先生がかつて、多喜二とアナキズムについて論じる価値があると示唆したので、仮に結論だけを述べた。

区別するようになる。彼はアナキズムとマルクス主義の思想をかなりよく知っていた。しかしそれを、峻別することなく考えていた。これは、当時の日本の思想状況によっている。彼は、ぼうばくとしてアナキズムとマルクス主義に関心を抱いていた。だが、これら両者の分裂がはっきりしないことと、それが北海道に伝わるのが遅いこと、多喜二が思想的にまだ未成熟なこと、これらの三つの理由のため、多喜二はアナキズムを卒論にとりあげた。

北海道の無政府主義の運動は、函館を中心とする印刷工親交会による自由連合派の運動と、函館、小樽、旭川などに組織された「鎖断社」の2つの流れがあった。⁵⁹⁾

小樽のアナキスト系運動は、旭川から移ってきた寺田格一郎によって、大正14(1925)年に小樽鎖断社が作られた。彼は黒色青年同盟の運動を起こした。寺田格一郎(1901-)は、兵庫県姫路市の酒造家の豪商の家に生まれた。大杉栄、古田次郎の影響を受けてアナキストとなり、早大文科を中退し、北海道を流浪していた。思想要注意無政府主義とされた。ペン・ネームは路郎である。旭川・小樽などで活動した。1927年に兵庫県にもどった。晩年は右翼活動家になった。

大正14年9月、小樽の中央座で演説会(小樽労働問題演説会)を開き、開会璧頭から、弁士(山田義男)、聴衆、警官との三つ巴の大乱闘を演じ、中止解散され、7名の検束者を出した。それらは、小川一男、佐藤由蔵、松吉小八(1891-)、丸山峰吉らである。田辺輝光が参加した。

この頃、寺田は肺患にかかり、運動ができなくなり、大沼渉⁶⁰⁾、三浦浩⁶¹⁾らは、土工となって監獄部屋打破同盟を作って各地の土工部屋を荒しまわり、稲田市郎、斎藤孔⁶²⁾、伊賀道清一郎(天外)⁶³⁾らは、積取人夫に身を投じた

59) 渡辺惣蔵『北海道社会運動史』レポート社 1966年、133ページ。

60) 大西(沼)渉、アナキスト、道内各地で活動。1926年当時、江東自由労働組合の中心。ボルに接近。

61) 三浦浩、アナキスト、主として小樽で活動。

62) 斎藤孔(1899-)、アナキスト。大沼(西?)渉と行動をともにする。道内では主として小樽で活動。

りしながら、寺田を助けた⁶⁴⁾。稲田市郎(1905-)は、小樽生まれ。ペン・ネームが水月で、アナキスト系の労働運動家、歌人であった。戦後、小樽で労働運動に戻った。社会党小樽支部の幹部として活動した。

瀬尾九郎(1896-)は、広島出身、特要甲号無政府主義とされる。1929年1月当時、視察をうけていた。香具師で、廃娼運動に参加した。畠山 清(1899-)、ペン・ネーム清身・清美)はアナキストで、1924年「赤と黒」に詩を発表し、その後、「矛盾」、「単騎」などに発表した。雑誌編集者だった。中出莊七は、特要甲号無政府主義とされ、1929年1月当時視察をうけていた。その他、大正時代の小樽の社会運動家・アナキストとして、富田弘吉、根岸角三がいる。⁶⁵⁾

日本の独創的な思想家、幸徳秋水が、アナルコ・サンジカリズムを持ち込んだ。彼は、大逆事件をデッチあげられて死刑となった。そして「冬の時代」が始まった。社会主義・社会運動は封殺された。その後、アナルコ・サンジカリズムはアナキズムの形をとった。その指導者は大杉栄である。1921年から22年にかけて、「アナ・ボル」論争という、アナキズムとマルクス主義との論争の中で、マルクス主義に移る人々がふえた。そして大杉が関東大震災の時に虐殺されていた、日本のアナキズム運動は急に弱くなった。

西欧では、アナキズムは、クロボトキンや実際運動で影響を与えたバクーニン⁶⁶⁾で有名であるが、日本ではクロボトキンの『パンの略取』はアナキズムのバイブルとなった。日本では、ロシア革命までは社会主義者といっても、アナキストもサンジカリストもコムニストも混合していて、そして実際にはアナキストの色彩の方が強かった。

さて、多喜二はクロボトキンを翻訳したわけだが、これについては先行の筆禍事件がある。神戸高商の学生だった大塚金之助⁶⁷⁾は、アナキスト、エンマ

63) 伊賀道清一郎、小樽出身、天外という名で活動。アナキスト系の活動家(1926年頃活動)。

64) 渡辺、134ページ。

65) 堅田精司編『北海道社会運動家名簿 仮目録』1973年。

66) Bakunin (1814-76)。ロシアの有名なアナキスト革命家。

・ゴールドマン⁶⁸⁾を、同校の『学友会報』で、1912年(明治45年)に紹介した。⁶⁹⁾これが筆禍事件となった。すでに見たように南亮三郎が社会主義者を取りあげて、罰を受けたのは、大正7年である。1920年に東大の森戸辰男教授は、クロボトキンの紹介論文を東大の雑誌『経済学研究』に載せた⁷⁰⁾。これが筆禍事件となった。クロボトキンはアナキストだったからである。森戸はこれを学問的に紹介しようとしただけであった。

多喜二の卒業論文は1924年である。実はきわどいことだった。なぜ多喜二論文が筆禍事件にならなかったのかは、推定であるが、公表物ではなかったこと、そしてほんの少し大正デモクラシーの雰囲気作用したからかもしれない。

15 宇野長作

多喜二と同じ卒業生で、年齢は多いが、宇野長作がいた。札幌出身で、札幌中学卒であり、高商に入った。札幌の苗穂13番地から汽車通学をし、その後、寮に、そして友人の玉井と下宿した。彼は自ら「無産階級の友」と言っており、創作に励んだ。玉井は、「卒業すれば肩書がつくんだぞ！ 何が無産階級の友だ」と言い、宇野は、「僕の創作活動には肩書は邪道なんだ。」と言った。彼は1911年12月6日、小樽を去った。小樽駅へ友人たちは見送りに行った。自主退学であった。

8日、東京府南千住におちつき、肉体労働を始めた。その冬、上野の山下でとつぜん胸の痛みにおそわれ、警官によって、札幌へ送還され、病に臥した。結核だった。その後復学した。1年遅れて大正13年に、つまり多喜二と一緒に卒業した。そして『クラルテ』同人になった。岩見沢中学の教師となり、数年

67) 大塚金之助(1892-1977)。後の東京商大教授。

68) Goldman, Emma (1869-1940)。ロシア生まれ、アメリカの女性無政府主義者。

69) 「主義者『ゴールドマン』」(『大塚金之助著作集』岩波書店 第1巻 1980年所収)

70) 「クロボトキンの社会思想の研究」(『経済学研究』1の1, 大正9年)。東大助教授を休職処分とされる。

後、昭和6年の秋に没した。

多喜二よりも先駆的な人がすでにいたのである。

16 多喜二の文学

伊藤は書く。「私は、多喜二の一級下にいた。在学時代から見知っており、一緒にフランス語の芝居に出たこともある。しかし私は彼と同人雑誌を共にしたこともなく、個人的親交もなく、芸術思想の上でも立場を異にし、政治的立場も別である。だが論争したこともなく、たがいに批評し合ったこともない、恩愛ともないのである。

ただ私は在学時代から彼が高い才能をもっていることを知り、卒業後の彼が文壇に出て世の注目を浴びるのを見て、当然のこととと思っていた。彼について人に聞かれれば、才能のある人だと答えるのをきまりとしていた。立場は違いますが私はその後、彼と同様に専門の文士となり、……しばしば人から多喜二の親友のように扱われるが、決してそうではない。」⁷¹⁾

武田暹は小樽中学を卒業し、職を求めて小樽を去り、札幌へ行った。多喜二は小樽高商へ進んだから、この時代は武田は空白である。ただ武田は大ていの土曜・日曜は小樽へ帰っていたから、汽車の中で、よく小林と合った。彼は小樽の町へ出るには汽車を利用していただけだった。合ったといっても同じ箱の中に二人がいたというほうが事実近く、お互いに誰であるかを十分に承知しながら、挨拶もしなければ、話もしなかった。ちらりと視線があった時などは、それぞれに含むものをもっていたせいか、2人の表情がへんにこわばったことも1度や2度ではなかった。

しかしこうして汽車の中で顔をあわせるようになってから、武田は多喜二へひそかに好意をよせるようになった。そのころの彼(多喜二)は、汽車の中では、いつも新潮社版の小型の『チェホフ全集』を読んでいるか、そうでなければ手に持っていた。「チェホフが好きなんだな」、そう思うと武田の口辺にもお

71) 伊藤整「小林多喜二碑についてお願い」(『緑丘』通巻42号)

72) 武田「回想の小林多喜二」(『小林多喜二研究』)206-7ページ。

のずと微笑がうかんできた。⁷³⁾

整は書く。「小林は、暗い写実主義の手法で、菊池寛が書いたような一種のテーマ小説を書いた。また彼は、色白で細面の小柄な男であったが、きつとなって人を見つめる癖があり、本質的の強気で、身体ごと物事にぶっかって行くという雰囲気身をまわりに持ち歩いていた。彼が学校の雑誌に芝居で豚になって女を襲う役をする男が、それがもとで恋人に見すてられるとい話を書いた時、彼はその役をした某君をモデルにしたのではない、と断わり書きした。これは面白い、書こう、と思えば、彼は容赦をしなかったのである。だから、彼が左翼運動に入っているという噂を聞いた時、すぐ、それは本当だろうと私は思った。……小林を小林たらしめたのは、その敢えて事をする気質とそれまでの四、五年間にこねまわすようにして身につけていた写実主義の手法の確かさであった。」⁷³⁾

糸魚川は、卒業近くなって、多喜二に「君は作家を志すのか」と聞いた。すると彼は「素質、能力がないのに作家を志してブラブラしているのは、それだけ社会に寄食することであって、社会的罪悪です。私は会社員になって、自分の生活を支えながら創作を続けます。社会が私の能力を認めるなら、その時、私は会社員をしなくても食っていかれるようになるでしょう。」と言った。⁷⁴⁾

久木は言う。確かに多喜二が校友会誌に書いた小説はズバ抜けてよかった。読み始めると最後まで読ませたのは彼の小説だけである。彼は教室ではいつも後ろの方に席をとり、授業中も教科書で小説をかくして読み耽ったものだ。久木も3年間彼と腐れ縁で同じ教室だった。

久木は、当時校友会誌に小説や哲学詩歌の類しかのらないので、大いに憤慨していた矢先に、編集部員の多喜二から是非何か書けといわれるままに、書いたのが Demurrage⁷⁵⁾ 論である。そのために卒業のときは、彼から編集部員の銀メダルを1コ貰った。

73) 伊藤 整『若い詩人の肖像』。

74) 『緑丘』42。

75) demurrage 貨物船の超過船舶料。

久木は言う。多喜二は在学中に別に思想的にはなにも片寄った考えを持ってはいなかった。それはあの校友会雑誌にのった小説や彼との会話で充分証明できる。しかし彼はよくしゃべる男だった。我々が話していると、よく横合いから首を突っ込んできたものだ。いづれにしても彼は面白い男であった。頭がでかくて背が低く、風采はあんまり上がらなかったが⁷⁶⁾。多喜二は小樽高商の名物男と言われた。

17 高商3年の作品

高商3年で、彼は次のような作を発表した。「藪入」である。これはすでに論じた。次に「ロクの恋物語」⁷⁷⁾である。多喜二には恋愛小説を書く力がある。ここで彼はその種の短編を書いたのだった。主人公の同じ職場＝銀行の友人が、その銀行の女給を恋した。だが、彼女は主人公を好きになった。主人公は友人のために、身を引く、彼女の愛を拒否するのだ。だが彼女はその友人を好きではない。そして不良少年と付き合いだしてしまう。

この短編では、ところどころ、うまく若い男性の精神状況を描いている所がある。ストーリーは、以前の多くの習作よりも面白くなっているが、まだ不十分である。文章は、主人公の語りの形式となっているが、わざと荒くして喋っているの、そのため、人によっては受け入れにくい。

印刷されてから、多喜二はこの小説を志賀直哉に送って批評を求めたのであった^{77a)}。

多喜二が高商3年生で、どれほどの社会科学的水準であったか、あるいはマルクス主義をどの程度知っていたかを、示す、最もいい材料は、評論「歴史的革命と芸術」である。

彼は書く。「生活維持のための物質的生産と経済的発展の程度こそは、其の国民の国家制度、法律芸術観念及び宗教上の思想の発展の基礎となるのであ

76) 久木久一 (『緑丘』42)

77) 『全集』 第1巻。

77a) 志賀あて手紙を見よ。『全集』第七巻, 331ページ。

る。……」⁷⁸⁾以下彼は言う、「これがマルクスの唯物史観の根本原理のアウトラインである」⁷⁹⁾と。多喜二は、多分、唯物史観の入門書を利用したのであろう、そう書いている。このころ、まだ多喜二はマルクスの本を直接読んでいない。

多喜二の結論はこれである。「そして、これが客観的価値ある絶対的な法則である以上、プロレタリアの芸術家が考えるように、芸術をもって歴史的革命を遂行さす手段であるとするのは如何に誤っているか。」⁸⁰⁾

後の1928年元旦の有名な彼の日記、「思想的に、断然、マルキシズムに進展して行った。」という記述と比較してみたい。彼はしかし、すでに高商3年のとき、頭ではマルクス唯物史観を正しいと見なしていた。ただし、引用されたマルクスか、解説されたマルクスを読んでいたであろう。あるいは、せいぜい、『経済学批判』序文くらいは、訳文で読んでいたかもしれない。

高商の校友会誌に多喜二は沢山の「編纂余録」を書いている。1923年3月発行の会誌の「編纂余録」について、すぐ大熊から「お目玉」を貰った。

10月発行の号で書く。「六号子 [=多喜二] がある時弁論を聞くに行ったことがあった。一人の人の演説が、どうも何処かで聞いたことがあるのだった。よく考えてみると、その人の演説はそっくりそのまま、「改造」に且つて出てあったものと同じであったのだ。⁸¹⁾」これは前述で紹介したように、弁論大会の件であろう。

12月発行の号で書く。「強制されて、そのことと妥協する。そして、その結果、その人の得たものは、たとい、百万巻の書物を読んだとしても、零であろう。⁸²⁾」多喜二は近代的である。

ついで多喜二は学校批判をする。「学校の、あの無趣味にも羅列された学科

78) 『全集』 第5巻 13ページ。

79) 同。

80) 同 14ページ。

81) 『全集』 6巻 576ページ。

82) 同 576-7ページ。

83) 同 577ページ。

よ。さても、その前で喰いたくないその学科を、口の中に「ねじり込まれて」いる学生の惨めな顔よ！」⁸³⁾

ついで1924年3月発行の、彼の卒業直前の号で、もっと痛烈に学校批判をする。「学校とは地獄である。」「地獄とは、先生が図書館の、なるべく生徒が見ないであろうところの本を、如何にせば自分の意見だとして、生徒に教うるを得るか、という事である。又なるべく学生が間違ふようにと、学生が読み落すであろう、と考え得られる最もつまらない、ノートの間から、問題を如何に探し出すべきか、ということである。如何にせば、二十七年前、学生時代にとったノートを繰り返し又繰り返し教えることによって、月々百八十九円の月給を政府から頂戴することが出来るか、ということである。」⁸⁴⁾

評論「リズムの問題」⁸⁵⁾は、主に短歌・詩・俳句におけるリズムの問題を論じたものであり、彼の一つの文学論である。小説「或る役割」⁸⁶⁾は、高商の外国語劇をめぐる話である。

多喜二は、小説「暴風雨もよい」を書いた。

ここでは、多分高商の教授Sが主人公になる。彼は人気がない、そして彼の教えている科目も学生に好まれない。そういう場合の心理が描かれる。彼は思う。「自分のタイプライターとコレスポネンシ（商業通信）のような実際のな、・・・ちっとも興味の湧きそうもない学科を嫌ってる [学生] Kの気持ちが分かる気がする。」「経済学とか、そういう純理論のものが学生にもてる」。どうしてか。それは自分自身によらないか、とも思う。「学生はカントの無上命令とは・・・」と言い出せば謹聴する。

自分の授業にほとんど出てこない学生Kに対して、彼は説諭しようとする。

「君のようにだ、文学をやり絵をやっているものにとっては、あんまりきまり切ったコレボンやタイピストのやるようなものは随分くだらなく見えるでしょう。」「いや、それは無理がないと思う。ほんと——うのところを云えば、僕自

84) 同 577-8 ページ。

85) 第5巻所収。

86) 第1巻所収。

87) 第1巻所収、「あらしもよい」と読ませる。

身僕の教えている学科に失望しているんです。くだらない学科だと思ってるんです。⁸⁷⁾」そういうながら、最後には教師の権力でKに出席を命ずるのであった。

高商でコレポンを教えていたのは、苫米地と中村である。だがこの2人をモデルにしたのではなさそうだ。他の教師であろう。そして学生は、多喜二の分身である。あるいは、こういう学生が随分いたことは、伊藤整が暗示している。

18 就職と卒業

2年生までの成績で就職が決まった。学校割当てで就職が決まる場合もあった。2年まで一生懸命勉強して、就職が決まった3年2学期から徹底的に遊ぶ人もいた。1940年代では、3年生になると、もう就職活動が始まった。各社が個別に学生を採用し、就職協定がなかったからである。当時、就職担当は根岸正一先生だった。

拓殖銀行入社受験の時の話を多喜二は、友人の島田正策にした。「いかに嘘をついたか」ということであった。島田は、どういうことだったか記憶がない。だが多喜二は「しかし、むこうでは高商で一八番とは大変よい成績ではないか、といわれた。」と言った。⁸⁸⁾

だから、小林が「高商で一八番だった」と嘘を言ったのだとしよう。手塚伝記によれば、彼の成績は、2年になるとき37番、3年になるとき19番、卒業のとき43番だったとされる。18番だと言ったとすれば、1番だけ嘘となる。もしかしたらこれだったのではないか。そうすれば、たった1番さばを読んだだけとなる。

森は書く。「卒業を数日後に控えたある晩、将来の夢を語りあって、その時できあがっていた卒業アルバムにお互いの感想を記して交換し合った。」⁸⁹⁾

大正一三年三月、多喜二は卒業した。大正一三年まで3学期制、つまり四～

88) 島田, 『緑丘』42。

89) 『緑丘』 27ページ。

90) 伊部, 『緑丘』。

八月，九～一二月，一～三月，であった。

卒業間際になると友人との離散会（送別会）が連夜催された。学生は，妙見川の料亭を初めて知り，芸者に初めて接した。中島屋とか開陽亭などがその場であった⁹⁰⁾。「妙見通りは花柳街である。ここを中心として，中島家，新中島，千登勢，美合，松の家，新松島，現長，高田家，其の他数々の料亭や見番が集まっていた。妙見川が中心を流れ，川水は決して豊かとは云えなかったが，流れに映った紅灯も美しく，垂れ下がった柳の枝葉もなまめかしい風情があった。夕景など島田や銀杏返しの芸妓をのせた人力車の往来もせわしく，雑穀澱粉商や仲買達，船会社筋などはこの世界のお客の花形だった。」⁹¹⁾

卒業式場は，図書館の閲覧室であった。伴校長の告辞があった。大正13年の卒業生は次であった。この中でかなりの人が多喜二より以前の入学である。

阿部豊作 雨谷茂民 荒木田定道 稲田省吾 伊部政次郎 魚谷源兵衛 岡本政治郎 牛木昂吉（入学は早かったが，病気でおくれた） 大谷辰雄 大木弘基 奥平信作 小倉謙三 岡部伊十郎 石黒政信 奥野盛夫（大正14年死）

石沢寿三（昭和5年死） 宇野長作 石井 宗（昭和8年死） 飯野英一（昭和13年死） 岩垂 裕 足立 登 梅原剛陽 小野尚志（新名 永司） 小田善雄 {博凱?} 石川清四郎 石岡彦次郎 井上 保 明石 公 麻生正夫 大熊康吉 岡崎俊雄 香川清夫 久保吉幸 小杉富太郎 向当賢一 木村吉三郎

木谷利治 桐 {駒} 田尚作 久保田敏三 黒沢道雄 黒田広治 黒後鶴雄 小林才一郎 小林 豊 古関周蔵（浜林先生がいた福島中から，5年修了で，大正10年に高商に入った。浜林に誘われた） 近藤 勇（旧姓 奥野） 兼平一郎 北村左次郎 金井健四郎（昭和14年死） 柏原喜一 栗山孝吉（新名 靖司） 交野盛賢 河合邦吉 小林多喜二 桂田勝三郎 小林愿一 久保栄吉 {吉幸?} 斎藤純男 榊原義英（小樽中卒，だが樽中には4年編入） 寿原（旧姓 林）九郎 佐藤定一郎 佐藤虎夫 渋谷綱紀 島 義治（戦死） 桜場春彦 佐々木 興（昭和12年死） 佐々木良雄 鹿野平次郎 早乙女宗治 境

91) 越崎宗一，31ページ。

常誠 島崎伊兵衛 桜井長徳(昭和49年死) 佐藤泰一郎 高松 勲 茶屋豊彦 田村丈太郎 富樫 武 豊口一郎 高浜年尾 立花英二 田中修吾 谷弥太郎 徳橋周吾(道外出身) 高橋与五郎 棚橋省吾 谷村義三郎(昭和5年死) 高村弥三郎(昭和6年死) 田崎善造(または道)(昭和8年死) 高橋 大 寺尾 巖(昭和11年死) 豊田準三 田中栄次郎 高橋益美 中山 栄 中尾 晃 中島烈勇 新沼(旧姓 岩崎)達郎 野界作成 野口与七 西村 迪(小樽中卒, 高商卒業してから大正15年病死) 中上仁三郎 中谷一郎 中川三五 永井次郎 西尾清一 乗富道夫(旧名 善雄)(昭和9年10月24日死) 東口 環 姫野 享(関西棋院の専門棋士になる) 林 俊一 原田 成博 広島 進 広田(旧姓 鎌瀬)力一 久木久一 藤田清助 二馬吉郎 星野新八 蓮田勉二 服部兵吾(鈴鹿山麓出身, 大正8年入学) 広野貞一郎(大正15年死) 幡豆英男(昭和3年死) 古館啓次郎(昭和4年死) 星野輝敏 福島正民 林 文平 福田勇一郎 広野充幸 藤崎 操 堀岡英一 町野 勉 宮尾藤之助(旧名 又市) 百田嗣郎 水上 貞 門間冬見 毛利直二郎 武藤 武 松永外雄 村岡 勉 森 武臣(昭和46年死) 前田重雄 三宅武夫 増子 栄 松川一馬 三浦兵太郎 牧 猛美 町野二郎 湯口善太郎 山田季郎 山田 稔 渡辺 清 湯沢 淳(戦死) 矢島(旧姓 松本) 喜市 渡辺公明(戦死) 渡辺伝吉(昭和7年死)

以上153名が卒業した。⁹²⁾ これ以外に, 上谷(小樽中卒)が高商在学中に病死している。

多喜二は後にこう云っている。「・・・金持の親類で学資を出してくれる事になった。そこにはパン工場を経営してゐたので, 僕はその工場を手伝ひながら, さん／＼”恩に被せられて, 又, 使用人達から敵視を受けて, 実に不快な思ひの中に高等商業を卒業した。」⁹³⁾

92) 『会員名簿』平成3年発行 緑丘会; 『大正13年卒業生文集』から。

93) 「コースの変遷」(『全集』第5巻, 1985年) 353ページ。

追記。本稿は, 高商史研究会の活動の一結果である。

前号「小樽商校入学の小林多喜二」(『商学討究』45の3)の訂正

ページ	行あるいは注	誤	正
38	注11)	就職S,	就職し、
45	注32)	伊東	伊藤
55	14	企画	規格
57	14	上京	状況
63	注74)	『民主文学』	夏堀正元「小樽と多喜二の文学世界」 (『文化評論』1988年4月号, No.326) 154-5ページ
63	13	正当	政党